

01 文
5385
8

報新濱横

り
ほ
ま

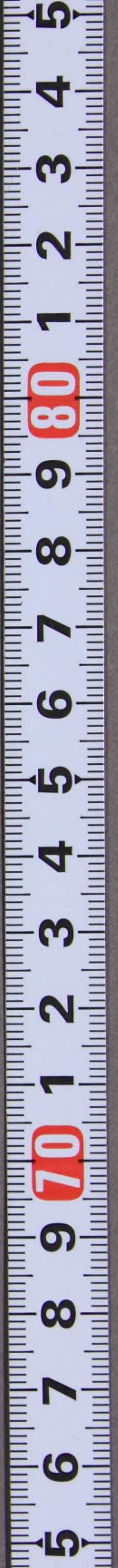
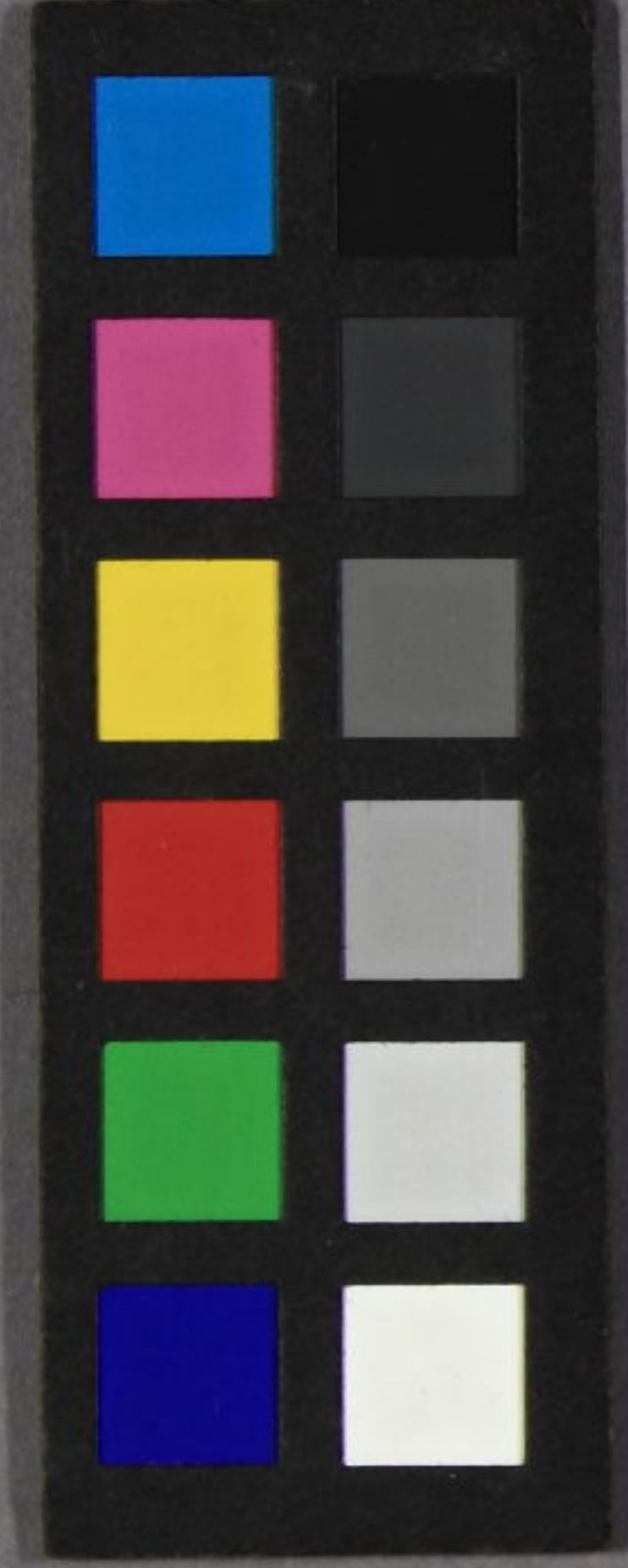
第六編

九十三番

ウエンリート

K.S.ASOM

定價壹匁



特 文庫10
7387
6

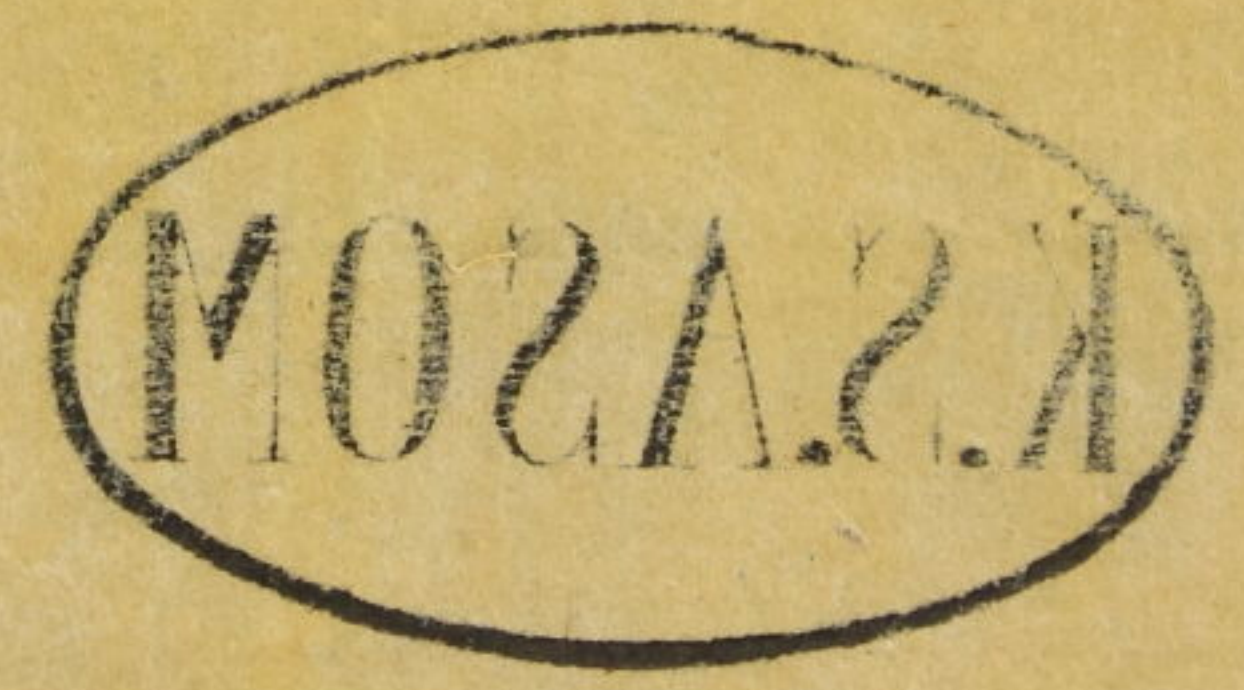
時條齋

第六齋

六十三番

ウエーニート

の

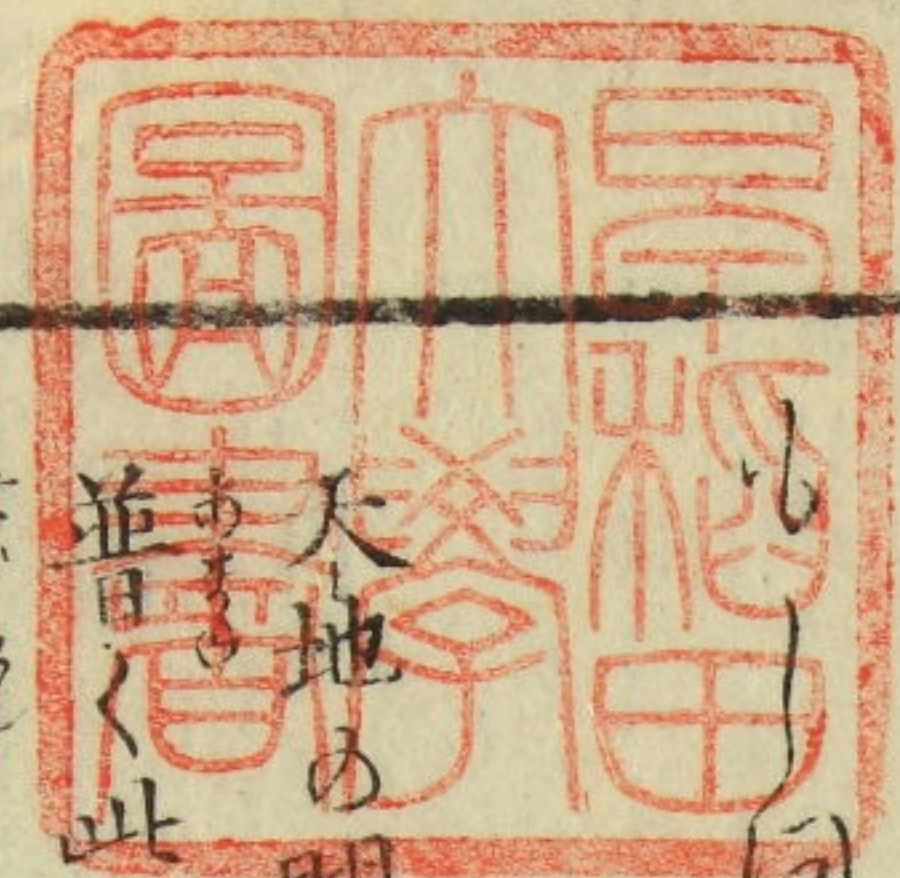


宝賢書

同六子二第六篇

慶應四年戊辰閏四月廿五日

江戸浪人の檄文



天地の間、大義の名分あるものなり。余等此小來れるもの、
普く此と明に、一々戮力せんばあるものなり。先小我老君

政權を擧ぐ

朝廷小歸されたるに、深意あることにて、外小外國の交際

日、開け文明の治、駢馬も及ぶ、隻能いさるは勢にありて、

内小政令多門とありて、統一せざるに能はざるの患あり、於

是自退いて、侯伯の列小就き、衆諸侯と共小、

下君を仰ぎ、邦内互に擬疑抗抵の心を、戮力して、萬

母十一六



國と並立せんと欲せし連たるなり、然らばんが何ぞ
祖宗三百年の政柄を挙げ、輕易をこれと歸させんや、
あつたに大變革の初頭より、一言の談事もたたく却て、
疑心を以て、我を待ち、兵威を以て、

宮門は迫り大い

轡下を騷擾するに至り、老君に固り我より歸され
政柄も預り聞んと欲せられ、心は非ぶに非ざん
ふも、畏なるべし

初冲の天子、上は在る、國家の危きと累卵に至ん
も計り難く、已が痛痒關、ぬ者の如く、傍を看せられ

さる、自ら臣子の至情にけり、さる、再も上洛し、
善を奉け、邪を存け、政道公平に歸せんと欲せし、
先供登京の道筋、薩長より惡意を挾み待受たる
故に、遂に鳥羽伏見の戦争とあり、故に其節の
勅命は薩長の師と戦ふとあり、此は万人の共に知る
所、毫も疑なり也、あつたに十二月以来、奉欺罔
天朝のいひ、又連日錦旗を發砲とあり、又叛逆たるこ
いふこと、當日に考る證跡あり、千歳は垂れて、
不朽の冤罪を負い、む名義は、人間の重なること、
故に一匹夫を誅するも、猶其罪案を明く、而後刑に

處まへきなり何ぞ此冤罪を刀負へしめ、擧國の大兵を
動しすに至るや、且我冤罪を蒙るもあはれ、弟を
して兄を伐しめ、臣をして主を弑せしめ、末家を
宗家を滅ししむるとを、命せられ、自ら朱節の政を施
されたるなり、凡そ
勅命の尊き所、不偏不黨、不倫不戾らず、天理を乖
ざるが爲、何れもせず、近頃、太政官より高札あり、人
五倫の道を、正まざると示さるるに、今倫理を蔑如し、名
義を願ふること此に至るもの、此素大猶強梁、
勅命其手、成まらざる、故に老君、白して、再師を挙げ

天下の爲、其を除くとを請ひし者、何れも、老君一切に
任せ、只管、罪を身負ひ、しめしめ、幾百万の生靈、屢塗
炭に苦むとを厭ひ、且我ら、抵抗せず、奉國の兵端、此より開
砲声止む時、なく、外國の測目、注視するもの、鬩隙、乘と、不
測の殃ひを醸さる、徳川一家の成敗、のそあはれ、
皇國の浮沈と、あはれんとを、畏まられ、方にて、東照宮の遺訓
にも、懇に垂成せしめ、しに非ざる、故に身、佛寺に入り、痛く責
て、恭順の義を盡し、屢歎願の使を馳せ、寸時も、多く、蒼生
の安堵、お帰せんことを、日夜、お庶幾せしめ、たるなり、然るに
叔父、お訴ふるもの、八年、て通せば、
京師、歎願せるもの、

叔父府に通ずべしとのひ、漸進して、我城下を迫り、前件の
寛罪を負へしむるに至る今寛典の處をとのふとも、固より
寛罪を負ひあめて、何ぞ寛典のふと、何らんや、臣子の情
忍らるりの何れども、老君愈恭順せしむ、人々に喻し、
戸を説き、我命を用ぬば、即ち我身の及せしむる
たりのとのひ、此寛何ぞ雪がざるを得んや、是我輩脱籍の奉
止むるを得ざる所なり、必老君の譴責の何れを知ると
雖、大義名分天地古今自ら已むべしとされば、相共泉下
明して罪を謝せんのみ、獨り此太平の久き先を

祭り老を養ひ、兒孫繁延兵火の難逢ざるもの、此
誰が徳澤ぞや、島津氏毛利氏と雖、同トく其恩を沐浴
せしにあはざるや、況や其他列侯譜代の者、亦何の心ぞや、
縱我衰弱せりとも、大義名分の間、衰弱あることなるは、
何ぞ正論讜議して、此寛を
朝廷の訴ふるものなきや、只仙臺侯首として、義を唱へ、
米澤侯を始め、奥羽の諸侯此の應ト、會津は社内ホの士
民義心確乎とて、動のば、北越諸侯も亦連盟して、義を
守るときも、然れども、仙臺の上書の、擁塞して達せば、會津
社内等の均しく寛罪を免はば、嗚呼天地冥々たる、何を其

此に至るや、我亦微力なりと雖、大義名分の爲に死し、
主家の冤罪を雪ぎ、万世の下、綱常を維持せんとするの赤心
あるのみ、万國の公法あり伸冤の師あるに由らば、若余輩
の議を以て公あらずばとする者あらば、日月の照覧する處邦内
の論もなし、此を萬國の公議の附して、其至當を決まべし、
これ余輩天地の誓言て布告する所なり

四月十七日

脱籍徳川臣中

○選録上海新報

蘇州の奉行曾中堂といふ人上海をきりて西洋人と議して

鐵路を造らうて蒸氣車ありて蘇州と上海の間荷物の運送
人の往來を便利にせんといふは此の成不成ハ未可知と
いふも蒸氣車の有益なる事なるが、おほいありされど
支那のさうめて頑固なる國なれば小民もさなぐの異論を
おこし、さかく疑惑を抱て是を作らざる事なるべし
英國にてはじめて蒸氣車を工夫し、じたる時西の海邊より
東の港まで、直直に鐵路を造らんとせしに其間の一の木
城ありて其城主たれをゆるさば、是れ依てやむを得
ずして三十里のほろりちを、しを造られざるを、鐵路成
就せし後わづのに一年餘に、しを城城主もその便利

に大益ありしをいふは、後悔せり依り、鍊路を造るるのよびよせし、其鍊路を造るるに造るるは、其の城下を造るるに造るるは、其の海岸に達せしをいひ、これより其の鍊路師も亦、其の造るるに造るるは、其の四十餘年前の更にも、英國へすべし、文明ある風俗となり、頃あれども猶、かくのどく、偏固ある城主ありし。

○選録煙臺新報

支那國北邊の捻匪といふ賊徒八萬人あり、紅衣紅巾といふ、眉を赤をぬき、四月五日その前軍多騎馬隊を天津城の十四里外まであつた、其のば支那國主あはし、いふおどろき

官兵を發してこれを伐と用意せり、天津におる英人の兵船を、その敵をふせぐの支度をたし、六月九ツ日、俄に郷民ども群をあつて、東南の方へ逃走り、されば何支なるかと、同に賊軍をいふに、いせき、其のとせき、たれば内外、士商どもは、その驚馬慌せり、老幼家賊を船におせて、紫竹林といふ處の邊へ、ちのく人あはし、北京より李鴻章、左宗棠といふ二人の、大將の命、とて大兵をひいて、天津の四方を警衛せり、此時の風説、いふま來る處の賊軍、たゞ先手の勢を、より、後軍、猶、いま、到び、といへり、ある英人馬、のりて、賊軍の、その、處、あつて、五、六、百、人、紅

衣紅巾あかぬいをきて馬うまの騎か手に小鎗こがを持て調練てうれんをたしぬる
とぞ夜よありて天津てんしんの南みなみをへんるをを火光ひくわう天あまををさすかゆ
是こゝに依よて城しろの内うち外そととんにとさるるに嚴重げんぢゆうの敬言けいごん衛ゑいせりかくて八日
の朝あしたのころとて賊軍ぞくぐんたちまぢりつくとるちかくあげまじしときとそ
李鴻章りこうぢやう左宗棠さそうたうと美國あめりか領事官コンシユル法國フランス領事官コンスルととんに滿州まんしゆうの
歩兵ふへいをひたぬる南方なんぽうの村里むらへ出て百姓ひやくしやう共どもに問とひ小捻匪せうてんひども十人
二十人にじゅうににんとちちの民家たみかへいりて刀とうをふるひ又また小鎗こがをふるちて人を
あどして金銀きんぎんをらひとる昨夜こゝろ村落むらへ火ひをうけあげらせると答こたへ
一人ひとりの曰いひ拾賊しやくぞく此時こゝろ天津てんしんをさると二十里にじゅうりにの処ところへ屯集とんじふせる人数にんすう
八千人はちせんにん餘あまありて婦女ふくぢやうも亦またとる馬うまのり刀とうを帶おびたりとて

西垣文庫

文庫 10

7387

6